

MINATO

**UNESCO** 

**ASSOCIATION** 

NEWS

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3.SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/KIMITADA MIWA PRES 発行所/潜ユネスコ協会 〒105-0004 東京都海区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/三輪公忠

2010年2月2日発行 第 118 号

次 目

P1 巻頭言

P2-7 国際シンポジウム「若者が構築する未来」

P8 日帰りバスツアー/ドイツ大使館訪問

P9 世界の味文化紹介「アルメニアのニューイヤー・ディナー」 P10 みなと区民まつり/フェスティばる一ん

P10-11 関東ブロック・ユネスコ活動研究会

P11 英会話教室

P12 事務局便り

### メディアの現状、著名な兄弟、昔と今 ― 秋山真之、好古と四出井綱英と綱正

港ユネスコ協会会長

司馬遼太郎の『坂の上の雲』が NHK のスクリーンに登場した。何年か前に、この企画がはじめて取り上げ られた時、作者はネガティブに反応したという。それは日中関係が歴史認識の問題でぎくしゃくしていた時 で、日清戦争か何かの扱いが、作者として気がかりであったためらしい。NHK はこれから3年にわたって放 映し続けるという。その「気がかり」部分はどう扱うのか、それこそ気がかりである。

一方、ジャパン・クールなどと漫画ブームに気をよくしていた節のある、日本の産業界、一般市民、それ に何よりもその発信基地として巨大な箱物の建造を計画した前政権の政策担当者等は、ここに来て勢いづい ている韓国政府が果たしているインドネシアなど海外における「韓流」ブームの興隆をどうみているのだろ うか。自然発生的なジャパン・クールに下駄をあずけ、日本の伝統文化に特化したような対外文化政策は、 韓国に学ぶべきところが多いのではないか。

NHK がインドネシアの「韓流ブーム」を取り上げたのは、11月29日の夕餉時、ちょうど『坂の上の雲』 の第一回目が開始する直前の時間帯の事であった。なにを今さらの感があった。というのは私自身国際交流 基金から日本文化講演を委嘱されて、ジャカルタで「武士道と日本人の男性文化」と題してお話をした 4、5 年前に、ジャカルタの街を車で移動している時に一番きづいた事は「韓流ブーム」を示す映画館の看板であっ た。日本は「霞んでいるな」という印象だったのである。

日本とインドネシアの関係は、先の戦争をとおして、なみなみならぬものがあった。欧米の植民地支配か ら解放という旗印の戦争に敗北したのは日本であった。オランダ政府はイギリス軍の協力を得て植民地支配 を再確立しようとした。その時スカルノ等インドネシアの独立戦争をたすけた旧日本軍の兵士の中に,多く の朝鮮半島出身者がいたのである。その話は内海愛子さんが夫 村井吉敬と共著した『赤道下の朝鮮人反乱』 (勁草書房、1987) に詳しい。

「坂の上の雲」は日本海海戦でロシアの艦隊を撃滅した主席参謀秋山真之を主人公とし、その兄で、「騎 兵隊の父」と称される後の陸軍大将秋山好古とともに登場する。歴史に残る著名な兄弟である。ところで 11 月27日の新聞の死亡記事に載った森林生態学の四出井綱英元京都大学教授は環境保全において「里山」が 果たす役割の重要さを指摘した事で知られている。ところで彼の兄、日本帝国陸軍中将四出井綱正が当時の 陸軍大学校で講義した戦争論に展開されていた日本的道義主義との関係で、私にとってはなはだ興味深い兄 弟であった。いずれその事について書く事もあろうかと思う。

 $(2009 \cdot 11 \cdot 30)$ 

## 第28回国際シンポジウム「若者が構築する未来」

日時: 2009年10月6日(火)18:30~21:00

会場:港区立麻布区民センター・ホール

パネリスト (敬称略、五十音順):

内山 ユウキ (地球の旅人ギタリスト) 梅田 亜由美 (女子美術大学美術館学芸員) スヴェン・サーラ (上智大学教授・EU事情) ピーター・オブラス (元東京外語大学教授・北米事情)

進行:松本 洋 (港ユネスコ協会副会長)



総合司会:三輪 公忠 (港ユネスコ協会会長)



元若者として軍国主義の日本を生き戦後を迎えた人間の思いをお話します。 22歳で亡くなった中学の先輩上原良司さんは「私は自由主義者で、日本が負けることはわかっているが、私が死ななければ日本は変わらない。だから私はあえて志願し、特攻兵として死んで行くのだ」と遺言にしました。

旧制高校の第一高等学校に在学中学徒出陣で特攻死した鷲尾克己という人は、 校長の安倍能成先生に別れの挨拶に行った折、「死ぬ覚悟は出来たのか?」との問

いに「それが出来ていないのです」。出撃直前にもう一度挨拶に行った時でも「もう出来たんだろうね?」「それが出来ていないんです」。つまり死ぬ覚悟の出来ていない人間でもあの時代の流れの中で、どこかで「自分が死なないと日本は変わらない」と言う覚悟で死んでいったのです。

私の先輩は「死んでも靖国神社に行きません。恋人は既に亡くなっているので、その恋人のいる天国に真っ直ぐ行きますから、靖国神社に行っても私には会えませんから」と母親に言い残しましたが、戦死すれば靖国神社に入ることになるわけですから、母親は毎年、靖国神社の大祭には参拝していました。これが日本人の母親の亡き子に対して出来る唯一のことだったのではないかと思われます。

東京オリンピックが開催されたのは戦後の1964年でしたが、実は戦前にオリンピックが来るはずでした。1936年のベルリンオリンピックの次が東京と決まっていましたが、中国における戦争の長期化で中止になりました。

オリンピックのあるはずの昭和 15 年は皇紀 2600 年に当たり、種々の記念行事が企画され、とり行われました。その一つにこの年を祝う奉祝曲を英、米、仏、伊、独、ハンガリーに依頼して友好の印として献じてもらおうというのがありました。日本政府の要請に応えて、次々と交響曲が贈られてきましたが、アメリカは中国での戦争に批判の態度としてなしのつぶてでした。イギリスの場合は、その批判を神武天皇への「鎮魂曲」として示しました。作曲者は世界的にも超一流のイギリスが誇るベンジャミン・ブリテンだったのです。

防共協定から軍事同盟へと関係が急速に進化していきつつあったヒトラードイツのドイツだけは大真面目に当時最高の作曲家と目されていたリヒャルト・シュトラウスの作品として奉祝曲を送ってきました。この曲は日本独自の音響をと、10 個ほどの梵鐘をキンコンカンと打ち鳴らす所からはじまるのです。政府は歌舞伎座を会場とし招待された内外の貴顕の前で初演奏をしました。この交響曲は「皇紀 2600 年奉祝曲」と題されていました。

戦後、読売交響楽団が一度演奏したことがありました。しかし私がこれだと思ってサントリーホールにでかけていったのは、はるばる遠くから特別来日したベルリンオペラの若い指揮者の演奏会でした。このドイツ人音楽家は、日本に行くのなら、最もふさわしい曲目はこれしかないと確信して「皇紀 2600 年奉祝曲」を主要演目に選び、そう公示されていたのです。

ところが演奏会の日が近づくと、急に演奏取り止めと新聞広告にでました。そのわけは会場側が右翼・ 左翼のアジで混乱するのを恐れたからだと聞きました。私は残念なことになったと思っておりました。 ところが当日会場で受け取ったプログラムには削除はなく、そのまま載っていました。実際演奏された のです。そうやって日本における左と右の妨害を避けつつ、戦後何十年も経てリヒャルト・シュトラウ スの「皇紀 2600 年奉祝曲」がドイツ人指揮者によって演奏されたのです。

これは日本における右と左に配慮した情報空間の一例と言えましょう。

日本の言論の自由は世界で20何番目とか、米国はもっと低いとか言われていますが、一番「自由」を言い立てている大衆政治国家でこのありさまとのことです。人々は知らず知らずにどこかから拘束され、あるいは承知して自己規制しているわけでしょう。

それは我々が文明と呼ぶものの限界なんですね。

#### 内山ユウキ氏



私はアラスカからアルゼンチンの最南端ウシュアイア島からブラジルへ 3万キロの道程を2年8ヶ月かけ自転車にギターを積んで旅をしました。ギターの道を志したかったのですが、それを後押しする力が弱かった。もっと世界を見てからギターの道を志したかった。

自分の進むべき道を探すべく旅に出ました。

北南米自転車縦断2年8ヶ月の旅をしたことで、未来に対する希望の芽と言うべきものが芽生えた気がします。それは小さいながらも何時も私に勇気を与えてくれます。宇宙に対してブレない、迷いがないという思いは、地球を旅し、自分の小ささを肌で感じることから始まったと感じています。肌で感じたことによって、幸せとは何か、希望とは何か、未来の我々は何処に行くのかの答えは自分の中に眠っているものではないかと感じる様になりました。自転車で体験した地球はとてつもなく広く、更にその外には無限の宇宙空間が広がっています。アラスカの夜空に浮かぶオーロラを見上げたときに感じた宇宙の大きさは人の大きさやエゴなどとは到底比べられるものではありません。自分はちっぽけだ、自分に何が出来るのだろうと絶望の方向に目を向ければ切りがありません。しかし、道端に咲く小さな花々にも、日々出会う色々な人々にも「こんなに素敵な部分がある」という目線さえあれば、世の中に常に希望や幸せを感じることが出来るのではないかと思うのです。

自分を取り巻く全ての環境や人々に幸せと感謝、希望を感じ、夢を持ち続けることこそが未来を作って行く上で素朴でもっとも重要で難しいキーワードではないかと思っております。

私は小学校低学年まで知恵遅れだと思われていました。そんな中で、ギターに目覚めることができたのは、両親や周りの人たちが最低限のやるべきこと以外は、あれをしろ、それをしなければいけないと言わなかったからだと思っております。そんな親に感謝しております。

大きな流れの中では向かうべき方向性は確実にあるでしょうし、勉強することは大事でしょうし、でも、子供時代はそれに気づかず、何が好きなのか、どうすればいいのかを模索しながら、二十歳を超えてから人は大人になって行くと思います。それで、ふとしたきっかけで個人の中のやる気スイッチを押すことが出来る。心がないとスイッチは押せないので、そういう心を育てて行くことも大事な側面ではないかと思います。

#### スヴェン・サーラ氏



我々は若者がこれから生きる世界と未来を想像できません。今の生き方に対して「これでいいのか」と言う疑義があり、未来を信じられないでいます。

最近、日本・ドイツともに選挙があり、日本においては戦後初の政権交代がなされました。そしてドイツでは大きな政党が徐々に縮小して、国民の信頼を失いつつあるという結果になりました。今のままでは明るい未来が描きにくいという背景があるのだと思います。

それには以下の二つの問題があると考えます。

- ①現在の経済や我々の生活様式がはたして持続可能だろうかという点。
- ②政策に対する説明責任がとれるのかという点。

環境問題が重要視される現在、我々が今の生き様を持続できないとされています。新しい持続可能な 社会とは低炭素社会で、その道を歩んでいる国はまだ少ない。地球の温暖化を止めるしかない。幾つか の欧州の国々は炭酸ガスの排出量を減らしてきています。ドイツは京都議定書に署名し、1990年から2015年の間に8%削減する公約をしました。現時点で、18%カットすることができました。東ドイツ経済の崩壊も関係していますが、西ドイツだけでも現時点で炭酸ガスの排出量を9%カット出来ています。他の国でも同様なケースがあります。しかし、日本は京都という日本の古都で京都議定書に調印しながら、6%の炭酸ガスの削減義務を破りました。国際条約(議定書)を破ったのです。日本政府は1990年以降手を打っておらず、逆に2005年には太陽電池を設置する際の補助金も止め、最近では高速道路の料金を安くしたことで、炭酸ガスの排出量が増加しています。

民主党中心の鳩山政権は野心的な数字、2020年までに25%カット目標を公約しました。どのように達成されるか未だ明らかになっていませんが、少なくとも持続可能な社会を目指すということに対してきちんと政治的な意志が表明されたわけです。これは高く評価すべきで、世界における日本のイメージを変えました。

炭酸ガスを削減するということは、まず太陽電池や風車を増やすことではありません。なお、持続可能な経済にするためには、社会全体、経済全体を変えていかなければならないのです。でなければ未来はなくなってしまう。鳩山首相が25%カット目標を公約してから日本ではパニックに陥る方もいましたが、これは現在の経済事情のみに配慮をし、未来、とりわけ子供の未来にどれだけ無関心かということを象徴する発言だと思います。経済というのは抽象的なものですが、環境問題の脅威はきわめて現実的なものです。解決策も現実的なものでなければなりません。そこで、炭酸ガス削減は経済ブームを起こすこともできます。これはグリーン・ニュー・ディールといわれています。炭酸ガス削減によってこそ、ドイツやデンマークなどのように、太陽エネルギーや風力エネルギー、熱効率の良い建築物等が急成長します。このような未来志向セクターにおいて、ドイツでは1990年以降200万人の雇用が生み出されたといわれています。日本は1970年代、経済危機を乗り越え、経済を再構築し、技術的リーダーになり、工業生産の多くのセクターにおいてリーダーとなった最初の先進国です。ですから、地球温暖化に対しても同じような戦いが出来るはずなのです。

2点目の説明責任については、近代社会、特に民主主義社会においては説明責任の問題に負うところが大きいと思います。近代民主主義の政治家にとって最も重要なことは再当選です。ですから、政策の中心的なテーマは短期的に結果を出せるテーマであり、長期的な政策は再当選の視野に入らないので、無視されてしまいます。決断や行動に対して、特に気候変動、年金問題など長期的な問題については政治家は結局説明責任を負いません。目に見える人気取りの政策や再選可能性の上がる政策を優先させ、多くの政治家は、長期的課題である「若い人の未来」について余り関心を寄せていません。それが、若者の政治への無関心につながっています。そして、この政治への無関心、未来に希望を失う結果で、最近若者がますます過去に、すなわち歴史に目を向け、未来よりも歴史に関心をもち、歴史ブームがおきています。歴史ブームは日本だけのことではありませんが、ヨーロッパ諸国より日本人の方が歴史好きなようです。しかし、「歴女」という新語が生み出されるほど歴史ブームが強くなると、大学で歴史を教えている私でも少し怖いなと感じます。将来のビジョンが欠如することによって歴史ブームが起きているのではないかと思うからです。日本に限らず、多くの近代社会において見受けられます。将来に希望がないから過去に、そしてそこから自分の人生にひとつの方向性を見いだそうとしているのではないかと思うのです。歴史に囚われず、明るい未来に立ちはだかる現代の問題や我々の脅威に対して、もっと積極的に取り組むべきと考えます。

#### ピーター・オブラス氏



私はバンクーバーのブリティッシュ・コロンビアで講師を、ワシントンのナショナル・フォーリンランゲージセンターでヘッドをしていましたが、そこでの留学プログラムは世界の地理について学ぶことでした。自国の国民の行動や文化の価値、世界的な文化に対して理解を深め、他の人々の創造性を尊敬することが必要で、自国の文化中心的なものの考え方を超えてグローバルな繋がりを理解する

ことにより、人類の問題を解決することが出来ます。それがカナダの学生を地球市民にすることでした。人類の安全保障、地球の安全保障について考えるために、饑餓や人権蹂躙にも関心を持ってもらいたい

と米国やカナダの教育者は考えています。そのためには学生の交流を促進し、学生を他の文化に精通させねばならない。国際的な教育は平和と安全保障と安寧をもたらすのに不可欠です。

ところが、日本における国際交流の政策は、大学の国際化、学校の国際化、社会の国際化にとどまっており、不十分です。やるべきはコスモポリタン的な日本の青年を地球村に送り出すことです。日本は国際的な舞台に乗ることにもっと努力するべきです。国際的な平和への貢献をもっと大事にする必要があり、国際社会で生きられる日本人をつくるためには自国の文化に対して尊敬の念を持ち、他の国の文化に対しても敬意を表す。国際教育をあらためて見直すことは、日本人が世界の豊かな文化を理解し、そして西洋が豊かな日本文化を理解することに他ならない。

ジェット (JET) というプログラムがあります。1997年に始まった英語教育のプログラムで、英語教育を日本の学校教育のシステムの中でやることです。この数年、文科省の行動計画に則って実践が行われてきました。英語教育の質を高めることが1つのポイントでした。外国人のアシスタント英語教師が英語教育をする重要性が認識されたわけです。あわせてその人を通して外国の文化について目を開くことになり、コミュニケーションのスキルを引き上げ、外国人と触れることにより外国人の文化や生き様を理解することができると考えられました。初等教育においても2002年以降、英語教育の重要性が言われ、公立小学校の90%以上が英会話教育を行っています。2年後には5、6年生で義務教育になります。その後は1年生から4年生まで英語教育がなされると思われます。若い人たちこそが地球の未来を創るのですから、その人たちを教育し、他の文化に触れさせていくわけです。

JETプログラムは国際化の重要性を社会に認識させました。 私は日本に行きたいカナダ人英語教師の審査の際には、「他の文化を知りたい」という点に評価のウエイトを置きました。

しかし、JETのプログラムは日本の青年を地球市民という風には見ておりません。日本で国際化が成功したと評価されるのは、日本人が世界で働けるようにならなければならないわけです。米国やカナダの学校で教えることの出来る日本の青年がなかなか育成できていません。

JETのEはイングリッシュではなくエックスチェンジ=交流なのです。ということは、日本からも人が出て行かなければならない。地理的に孤立している日本のような人たちは他の国の人たちと交流する必要がある。しかし考えてみると、多くの日本の青年が留学や旅行をしています。さらに外国で働くことで外国の文化を知ることが出来れば、地球に貢献できる新しい地球市民として認識されるのではないでしょうか。日本の青年が英語力を身につけ、地球の地理・科学・数学・芸術に精通して米国やカナダなど世界中の僻村で教えることができないでしょうか。日本の青年が世界に教えに行き、そしてグローバルなパフォーマンスをやる日本の青年が育成されればと思っております。そして文化的な外交だけにとどまらず、地球グローバル外交までやってもらいたいと思っております。

JETのプログラムは国際化の重要性というのを認識しながらも、未だグローバルに目を開いていないと言わなければなりません。

米国やカナダでは、人と人とのネットワーク作りの大切さを認識し、グローバルな目標を達成し、交流プログラムを実施してきました。米国、カナダの政府は学生を海外に出すための予算をつけるべきと認識しています。日本は福田首相が 2008 年に 30 万人の留学生を日本に迎えると言いましたが、たったそれだけ。日本の学生をもっと海外に出すというイニシアティブは何処からも聞こえてきません。国際交流、国際交流と叫ばれてきましたが、JETのEが教育から交流になって欲しいものです。

若い人たちの中には英語が上手く話せ、グローバルな組織で働ける人がいないわけじゃない。

90年代に国立大学で国際交流プログラムがスタートしました。米国と日本の国立大学の学生の交流で、東大、大阪大、北海道大、名古屋大、東京外語大の5つの大学が関わっていましたが、日本の教授たちは英語で話したり教えたりしたがらないのが問題だと指摘されました。しかし英語で日本語と日本文化を教えるクラスの教師をリクルートしましたら、多くの応募者がきました。現在は30ほどの国立大学が学生の交流を行っており、200人の教師が大学で英語で教えています。あらゆる大学で英語で授業をしている、そういう時代になっています。

国際化といいますと、英語を教えるなんて、日本を出て海外で英語で教えるなんてとても無理だと思われているようですが、そうではありません。逆に日本の先生方がJETプログラムの先生になって海外で教えて欲しい。もうそこまで来ていると言いたい。

#### 梅田亜由美氏



女子美術大学・相模原キャンパス内にある美術館「女子美アートミュージアム」 に学芸員として勤務しています。学生と一緒に、アートを通して地域・社会と関 わる様々なプログラムを行っております。

初めに紹介するのは、美術館の近くにある神奈川県立相武台高校との「アートで地域とつながるプロジェクト」です。昨年の活動は「Finding Logo!」。生徒にロゴマークとは何かを教え、その後、近くの商店街に生徒自身が取材に行き、ロ

ゴマークを作成しました。実際に採用されたロゴもあります。

今年度行っている「トキメキ模様大作戦」は近所に住む大人たちの思い出の模様について話を聞き、 一冊の本にする企画です。

次に、視覚に障害を持った方と一緒に言葉を使って作品を鑑賞するプログラムをご紹介します。

視覚に障害を持った方と言葉で作品を鑑賞する際、作品の大きさや材質、絵画であるとか立体であるといった形態はある程度伝えますが、その後は物理的に正確な表現よりも、それを観たとき何を感じたか、何を思ったかを中心に話します。どちらかと言えば、感情を伝え合う・感じることに重点を置いて会話を交わし、互いに作品の本質への理解を深めていくプログラムです。

抽象画の鑑賞は難しいといわれますが、抽象的だからこそ作品を表現するために選ぶ言葉が人によって異なり、言葉を使った鑑賞をすると、とてもおもしろいです。たとえば、同じ青でも「晴れた空の色」「ドラえもんの青」といったようにさまざまな言葉が出てきます。

また、学生たちは「説明してあげよう」と意気込んでプログラムにのぞむのですが、実際、一緒に鑑賞すると、参加者と学生のどちらがリードしているのか分からなくなります。それは美術鑑賞が自分の人生経験を元にするものだからで、参加者が学生よりも人生経験が豊富で、学生とは異なる体験をしているからです。学生はそれを知り、衝撃を受けます。

そのような体験が学生にとっても、参加者にとっても、大切なことだと考えています。美術館は、新しいことに関心を持つきっかけが生まれる場、美術にはこんな力があるのだと実感してもらえる場であってほしいと思います。

最後に「みんなの美術館プロジェクト」についてご紹介します。このプロジェクトでは、普段美術館に縁遠いと思われる人と一緒に、美術館の不便なところやとっつき難い点などを考え、美術館を新しくデザインしていくワークショップを開催しています。11 月には横浜市民ギャラリーあざみ野で、聴覚に障害のある人、歩行が困難な人と一緒に美術館をデザインするワークショップを開催します。女子美アートミュージアムでも3月に開催を予定しています。

若者が未来を構築する際に大切なことは、様々な価値観、ものごとの多様さに触れ、それを真摯に受け止めること、その一方で、その出会ったことを柔軟に楽しむことだと思います。そのためには、出会ったモノや人との関係は、変えていこうと思って変わるものではないけれど、何かふとしたキッカケで変わるものだと実感することが必要で、そこに可能性を見出してほしいと思っています。

#### 三輪公忠会長

総括します。

今日の若い人は我々年長者があずかり知ることが出来ないほど、いろいろと興味深い未来設計を抱いているらしく思われます。

サーラさんとオブラスさんの報告を伺いながら気付いた事は、日本では国際的に通用する正確な情報から外れた情報の波の中で、何かわかっているような気分にさせられているような気がしました。実際日本は世界の流れから取り残されてしまっているのではないかという印象を持ちました。

そんな現状ですが、日本人にはそれなりの生き抜く文化的力があるようにも思われます。それは和洋 折衷でも酩酊をおこさない、平衡感覚といったらいいでしょうか。たとえば戦前から日本では、各界の 指導者たちをはじめ一般の中産階級の人々でも、ごく普通に、家を建てるといわゆる文化住宅様式で、 少なくとも来客用の応接間は洋風にするという和洋折衷の生活文化を生きてきました。その意味で洋の 東西に二股かけた日本人には、他には見られない繊細な感受性があるのではないでしょうか。そこから 今はやりの日本独特のソフトパワーがうまれてくるように思われます。

私も含め、敗戦後の米国占領時代、たいていの子供は、初めて米国文化に触れたわけです。日本占領 統治はアメリカ主導で日本文化のアメリカ化に成功したように見えます。しかし最近読んだエッセーに は、戦前の東京の中産階級以上の人たちの生活文化は、実はアメリカ文化そのものといってよいくらい であった。だから戦争に負け占領統治下の日本に滔々とアメリカ文明が流入したかに見えたときでも、 「昔、我々がやっていたことと同じじゃないか」とごく自然に戦後の変動になじんでいったというので す。

実体験からそう言える人がいるわけですが、私は戦後初めてアメリカ人を見ました。しかも米国に留学をしましたが、その頃我々が持っていた米国に関する情報は、米国の文化発信の仕方により、偏ったものでした。第一次世界大戦のベルサイユ会議に同席したヨーロッパ人が、米国人をほとんど理解していないことに米国の代表が驚き、ハリウッドに映画戦略を託し、欧州人の蒙を開く文化発信をはじめました。

第二次世界大戦後、アメリカはソ連との冷戦に勝ち抜くために、いっそうハリウッドの重要性が増しました。

まだそれに至らない間に、日本の対中国戦争を批判的に取り上げた映画が、ハリウッドで作られていました。宣伝映画です。南京虐殺は1937年12月のことですが、それから3年たって作られた「なぜ我々は中国で戦うのか?」というハリウッド製映画は3万人が殺されたとしています。国際社会に正義を確立しようとする米国の宣伝映画が3万人と言っていたのです。歴史を研究している私は、これは意味のある数字だと思っています。クヲリティー新聞の誉れ高い『ニューヨークタイムズ』も事件直後に3万人と報道しています。それが後になると30万人と言われるようになったりします。

そういうわけで、国際情勢に関する情報は、一メディア、一国の発信だけを読んでいたのでは駄目だと気付かされます。

今日は4人のパネリストの方々から学術的、あるいは実体験的なご報告をいただきました。ドイツの 先生、アメリカの先生、日本人で実験的で面白い教育プログラムを考案し実践している先生、そして若 くなければ出来ない、若くてもやらない人はやらない、優れて現代的な冒険探索旅行を自分の人生設計 に取り込んだ若者の一代表のような音楽家でした。

発信元を異にする情報を的確に利用するのには外国語が必要になります。英語讀解力はかなり役に立ちます。義務教育でも英語学習時間が他の教科目の時間を削減するほどに力をいれています。教師も生徒も苦闘を強いられています。しかしそれでことたれりとはおもえません。

一方、英国の高校では外国語を学ぼうとする学生が急激に減少しているそうです。オブラスさんの報告されましたカナダは元々が多文化主義で、地方の図書館でたった一人のマイノリティのカナダ国民が「自分達の言葉で書かれた文学を読みたい」と申し出れば、法律により図書館はその要望に応えねばなりません。例えば、ウクライナ語やチベット語で書かれたものを所蔵しなければならないことになっているのです。日本にもそのような時代がくるのでしょうか。

内山さんのギター演奏、高井副会長からの「寺子屋運動」の説明と募金のお願いでシンポジウムは終了しました。

(学術文化委員会 佐野幸子)

### 日帰りバスツアー2009「白洲次郎の思い出を訪ねて」

MACIFICATION TO

2009年9月27日(日)

今年の日帰りバスツアーは、旧白洲邸の武相荘と江戸東京 たてもの園への探訪でした。

NHKの番組「その時歴史が動いた」、NHKスペシャル「白洲次郎」が放送されたためか、42名の定員のところ、120名を超す応募がありました。毎回のことですが、「落選」の通知をだすのは心苦しい思いです。

当日は雨の心配もなく、8時40分に新橋を出発、小金井市にある江戸東京たてもの園に向いました。日曜日で道路の混雑が心配されましたが、予定より早く到着できました。「江戸東京たてもの園」は1993年江戸東京博物館の分館として作られました。ここには、現地保存が不可能な文化的価値の

高い歴史的建造物が移築され、復元・保存・展示されています。私たちはボランティアのガイドさんの案内で、日本近代建築の発展に貢献した建築家<u>前川国男の自宅</u>、東京銭湯を代表する建物の<u>子宝の湯</u>、明治から昭和のはじめにかけて日本の政治を担った<u>高橋是清の住まい</u>などを見てまわりました。「昔の建物はいいネー」と懐かしんで見た後は蔵造りの休憩所で昼食です。サービスで出されたうどんは好評で「おいしかった・・・」とみなさんに満足していただきました。

食後の車内でウトウトしているうちに次の目的地、町田市にある武相荘に到着しました。

予想通り混雑していましたが、茅葺屋根の家を見ているうちに心が落ち着きました。白洲次郎は昭和18年日本の敗戦を見抜き、この鶴川に移住し、住まいを「武相荘」と名づけました。武蔵と相模の境にあるこの地に因んで名づけたとのことです。彼は若くしてイギリスに留学、ケンブリッジに学び、戦後吉田茂に請われてGHQとの折衝に当たりましたが、GHQ側の印象は「従順ならざる唯一の日本人」でした。また、夫人の白洲正子は作家・随筆家として有名です。次郎手製のスタンドなど邸内には夫妻ゆかりの品々が所狭しと展示してあり、過ぎ去った時代を偲ぶことができました。

充実した一日を過ごし、無事新橋に到着しました。安全運転と楽しい案内をしていただいた運転手さんとガイドさんに感謝して、今回のバスツアーも成功裏に終わりました。

(会員開発委員会担当常任理事 平方一代)

### ドイツ大使館を訪問して



日時: 2009年11月16日(月)10:30~11:30

会場:ドイツ大使館

ベルリンの壁が崩壊して20周年となる、平成21年 11月16日(月)10時30分からの1時間、20人 と指定された少人数で、有栖川公園の向かいにあるドイ ツ大使館を訪問した。身分証明書を提示しての入館だっ た。ロビーにはそれは沢山の写真が展示してあったが、 丁寧に観ている時間はなく残念だった。DVDを用い、参 事官・広報部長のヨアン・バイサットさんの流暢な日本 語でのドイツの紹介があった。

ドイツはヨーロッパの中心にあり、9つの国境がある。人口は8,200万人で日本の2/3ほど、首都はベル

リン、ドイツの近代歴史の紹介へと続く。1961年ベルリンの壁が築かれ、80年代にはこの壁を壊そうという平和運動が始まり、1989年11月9日ベルリンの壁が崩壊した。ドイツは1年以内に統一された、と述べておられたが、一言では言い尽くせないさまざまな歴史があった。大使館の塀に掲示してある26枚の写真からも伺える。ドイツにおけるユネスコ世界遺産は32箇所、文化、経済についての話もあった。次に教育費についての説明では、90の総合大学があり、190の専門単科大学、高校いずれも公費。私立学校でも1ヶ月200ユーロ(3万円位)の上限額とのことだった。福祉については完璧な制度とおっしゃっており、安全が守られている。消費税の質問には19%、但し食品、書物は7%というお答えだった。日本語で紹介してくださったバイサットさん他、訪問に関わってくださったスタッフの皆さんにお礼を申し上げ報告と致します。 (会員開発委員会副委員長 井口フミ子)

### 世界の味文化紹介「アルメニアのニューイヤー・ディナー」

日時: 2009年11月28日(土)12:00~15:30

会場:港区立男女平等参画センター料理室

講師 中島メラニアさん(日本アルメニア友好協会会員)

メニュー・トルマ・ハリサ・鶏肉のサラダ・きのこのオーブン焼・蜂蜜とくるみのパイ



小春日和の11月最後の土曜日、今年最後の世界の味文化紹介「アルメニアのニューイヤーディナー」が行われました。 男性が5名も参加され、女性の参加者と共に料理に挑戦されました。講師は、中島メラニアさんです。17年前に来日されたメラニアさんは日本語が堪能で、当日はお嬢様のアナヒータさんと一緒にいらっしゃいました。

アルメニアでは子供から大人までお正月を楽しみ、テーブルいっぱいになるように料理を出すそうです。それには今年 一年が豊かで幸せであります様にとの意味が込められてい

るとの事でした。ちなみにアルメニアのクリスマスはお正月後の1月6日で、肉は食べず魚料理などを食べて静かに過ごされるそうです。

今回は温かい料理だけでも少なくとも7つは作るという ニューイヤーディナーの中から、挽肉と野菜を煮込んで作る トルマ、鶏肉と小麦を煮込むハリサ、鶏肉のサラダ、きのこ のオーブン焼、蜂蜜とくるみのパイの5品を教えて頂きまし た。

初めて作る料理に参加者の皆さんも最初は戸惑っていそうでしたが、メラニアさんに質問したり、テーブルの皆さんで協力し合ったりして、それぞれのテーブルの鍋からオーブンからとても良い匂いが漂っていました。



きれいに盛り付けた豪華なニューイヤーディナーを、気分を出すために解禁されたばかりのボジョレーヌーボーやメラニアさんがご持参下さったアルメニアのブランデーちょっぴりと共に味わい、参加者一同楽しいひと時を過ごしました。



お届け致しますので、ご期待下さい。

「思っていたよりもさっぱりしていて美味しい」「同じ鶏肉でも調理法で全く違うものみたい!」と参加者からもとても好評でした。

今回、ブドウの葉やブランデーなどご持参下さり、又、調理中各々のテーブルを何度も回り、皆さんの質問に丁寧に答えて頂いたりと、きめ細やかな心配りを頂きました、講師のメラニアさんには心より感謝いたします。当日の朝の準備から調理の間ご協力頂いたお嬢様のアナヒータさんもありがとうございました。

料理委員会では今後も、楽しい雰囲気の中、料理を楽しみながら色々な国の文化を学べる場を

(世界の料理委員会 篠田敦子)

### みなと区民まつり 2009

2009年10月10日(土)、11日(日)



今年のみなと区民まつりは、台風18号の去った後の10日、11日で、快晴のよい天気に恵まれました。会場に来られた多くの人々も、よい天気に、歩く姿、顔の表情も明るくいきいきしていて、来訪者を見ているだけで、今年のまつりには、天が味方してくれたのだと思いました。

港ユネスコ協会は今回、各委員会制作のパネルをテントの中に掲げました。またアラビア語書道で名前を書く実演を通じて、訪れた方々にアラブ・イスラムの文化に少しでも触れ

ていただくことで、世界の中の日本とアラブという二つの文化を知っていただくことになりました。 他にも、ミニ・バザーや国旗あてクイズを行いました。

11日には、武井港区長もテントに来られました。多くの方々のご協力で、今年も無事に終わりました。アラビア書道とミニ・バザーを通じての収益は、9,600円になりました。ありがとうございました。

(みなと区民まつり委員長 北岡修)

## 秋だ!まつりだ!!フェスティばる一んだ!!!



日時: 2009年11月6日(金)

会場:港区立生涯学習センター、港区立桜田公園

毎年恒例になった港区立生涯学習センター(通称「ばるーん」)のお祭り「フェスティばるーん」が今年も11月6日(金)の一日、生涯学習センターと桜田公園で盛大に行われました。秋にしては暑いくらいの一日でした。

「フェスティばるーん」は日頃センターを利用してい

る団体の活動成果を発表する場です。今年も、センターの館内外で展示発表、作品販売・体験、舞台発表が午前11時から夜の8時まで行われました。ここに事務局を構える当協会も昨年同様、協会の活動内容をパネル展示の形で披露しました。

書道、絵画、押し花、いけばな、俳句、川柳から始まって、 歌や踊り、太極拳、ミュージカル。さらには吹き矢に竹とんぼ と、いろんな活動団体が参加しました。

極めつきは茨城県の特産品販売の横で売っていたカニ汁とカフェー・トゥの豚汁でした。来年もあるといいのですが・・・。 (事務局長 水野隆)



### 2009 年度関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 栃木

日時: 2009 年 10 月 3 日(土)、4 日(日) 会場: 足利市民プラザ

10月3日(土)~4日(日) の2日間にわたって、足利市民プラザにて開催されました。この研究会では、「広げよう、未来を拓くユネスコの輪を」「ESDとユネスコ・スクールを考える」というテーマを掲げています。(ESD=持続可能な社会づくりの担い手を育む教育。ユネスコ・スクール=ユネスコ憲章に示

されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実現する学校)

**第1日目**は、オープニングに足利少年少女合唱団のコーラスの披露があり、午後1時から開会行事。 続いて、フォーラムと、活動報告があり、6時から交換交流会というプログラムでした。

フォーラム  $(13:45\sim16:00)$ 

\*基調講演:文部科学省国際統括官補佐、清水宣彦氏の「ユネスコ・スクールについて」

\*事例発表:東京都江東区立東雲小学校校長、手島利夫氏

\*パネルディスカッション:テーマ「ESD とユネスコ・スクール」

今年は「国連・持続可能な開発のための教育 10 年」の中間年であり、また、日本ユネスコ国内委員会が進める「ユネスコ・スクール」に関して、民間ユネスコ協会が、学校教育と協働する働き、学校と社会を結ぶ役割や連携を担えないか、という新しい活動テーマが投げかけられました。

(港ユネスコ協会副会長 高井光子)

第2日目は、分科会(9:30~11:30)と、全体会と閉会行事。午後1時からエクスカーション。

第1分科会のテーマは、「未来に伝えたい地域遺産」、第2は「ユネスコ活動の充実〜世界寺子屋運動を中心に 学びの輪こそ平和の砦」、第3は「ESD/ユネスコ・スクール 学校から地域へ〜地域で広がる環境学習」でした。

私(秋山)は第1分科会に参加しました。事例発表1は、「世界遺産保護活動『日光の社寺』環境モニタリングに参加して」で、日光ユネスコ協会が参加した大気汚染物質のチッソ酸化物を採取するカプセル設置および回収作業についての報告。事例発表2は、「ユネスコ青年スタディツアーin 群馬」で、都ユ連の青年と群馬の青年37名が、世界遺産暫定リストの「富岡製糸場」、「アプトの道・めがね橋」等を訪れた1泊2日のスタディツアーを通して意見交換をし、交流を深めた報告でした。(会員開発委員会委員長 秋山雅代)

研究会には、当協会から、秋山雅代、島田和美、高井光子、友金守、水野隆の5名が参加しました。

## 港ユネスコ英会話クラス





港ユネスコ協会が主催する英会話教室は初級と中級の2つのクラスがありますが、どちらのクラスも他の英会話教室と 異なる点として講習をリピートして長く続けている生徒が多いということが挙げられます。

理由は二つあると思います。一つ目は授業料が安価なこと。 14回コースで22,000円(非ユネスコ会員24,000円)ですから、一般の英会話教室に比べてお得です。

二つ目は、私はこれが大きな理由だと思うのですが、クラ

スがアットホームで温かいということです。アメリカ人のマーク・マードック先生はすぐに生徒の名前を覚えて必ず全員のことを名前で呼んでくれますし、生徒も年齢、性別、職業、英会話受講歴さまざまですが皆仲が良く、授業中はいつも和やかです。中級クラスには中国人や韓国人のクラスメイトもいて多国籍な雰囲気があります。

レッスンは、一人ずつ最近の出来事についてスピーチ、テキストを使ってイディオムなどの学習、休憩 (お茶を飲みながらフリートーク)、ゲームやリスニングの学習という流れが多いです。

ご興味のある方は一時間の無料見学ができますので、お気軽にお問い合わせください。

一緒に楽しく英語を学びましょう。 (語学研修委員会副委員長 山澤絵海)

# 事務局便以

- 【新入会員】《個人会員》松浦絹枝さん《家族会員》小滝秀明さん·奈穂子さん《個人会員》菅原のり子さん、 江原音子さん、佐藤美子さん(入会順)
- 【**訃報**】 当協会の理事で元建設大臣の大塚雄司様が本年1月10日に逝去されました。心からご冥福をお祈りいたします。
- **【今後の行事予定**】(詳細はチラシやホームページで別途ご案内いたします)
  - ☆ 2月9日(火) 第 27 回ディプロマッツ・レクチャー(会場 国際文化会館)

#### ~ご寄付ありがとうございました~

ユネスコ世界寺子屋運動へ: 第 28 回国際シンポジウムの会場で(2009.10.6) 16,000 円 ユネスコ世界寺子屋運動へ: 第 2 回国際理解講演会の会場で(2009.11.26) 7,000 円

### 山形県新庄中学校の生徒さんの訪問を受けました

\* 11月12日(木)の午前 10 時半から正午まで、新庄中学校2年の生徒5名が修学旅行の一環で当協会事務局を訪問してくれました。ユネスコが何故誕生したのか?世界寺子屋運動ってどんな活動なのか?を中心にお話ししました。また、全員が積極的に質問してきました。

今はITの時代。終わってから聞いてみると、生徒のみなさんは出発前に学校でインターネットを活用してユネスコについての予習をしてきた、とのことでした。 (事務局 水野隆、立花良子、笠原正子)

#### 港 ユ ネ ス コ 協 会 事 務 局 ( 火 ~ 金 1 0 : 3 0 ~ 1 7 : 3 0 )

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 FAX 03(3434)2233

電子メール: minato-unesco@nifty.com ウェブサイト: http://minato-unesco.jp/

■編 | 集 | 後 | 記■◇NHK「坂の上の雲」第 1 回に、英会話教室のマーク・マードック先生が登場されたので、身をのりだして画面を見ました。1 回限りの役のようなのがちょっと残念ですが。(高井光子)◇日が暮れるのが早くなると、出かけるのも億劫になりがちです。最近は、宅配飲食店のバリエーションも増え、なかなかおいしいものがいただけるので、たまに奮発して、お家で美食を堪能しています。(島田和美)◇11月初め、アフガニスタン、カンボジア、ラオスから来日した現地寺子屋の運営職員の皆さんによる報告会が横浜であった。熱心な説明とスライド上映から、各地の様子や問題点等を知ることができ、有意義であった。(棚橋征一)◇季節の行事を追いかけるのが好きだ。この季節だと酉の市。今年は11月に二の酉まで行われた。各地の鳳(大鳥)神社で市が立つが、見に行くのはやはり浅草。毎年大賑わい。酉の市が終わると愈々師走である。(須田康司)◇12月9日(水)の MUA サロンで『沖釣り』の話をみなさんにさせていただきました。退屈せずにお聞きいただき、沢山のご質問もいただき、ありがとうございました。この冬はヒラメが例年より釣れそうな気がしてます。(水野隆) ◇今号のブレティンの編集を担当させていただきました。あらためて当協会の事業の多彩さと多くの方のご協力のもとに成り立っていることに感動しました。(中前由紀)

港ユネスコ協会ウェブサイト <a href="http://minato-unesco.jp/">http://minato-unesco.jp/</a>

随時更新中!是非、ご覧ください♪